『だからタヌキはまた嘘をつく』　作：岩本憲嗣

■あらすじ

『タヌキのヘソ饅頭』がヒットした、遅咲きの絵本作家・本田勝男は河口湖町の書店に訪れていた。

何度も経験している筈の読み聞かせイベント。けれど今回は終始落ち着かない様子。

それと言うのも、かつての恋人が別の男と結ばれこの街に居るのをSNSで知ってしまったからであった。

イベント後のサイン会で一人きりでやってきた少年に尋ねられる。

『なんでタヌキはいつも悪者なの？』

それに対して上手く返答出来なかった本田。

翌日、書店員の計らいでカチカチ山へ観光に行く。

そんな最中、本田はSNSで見かけたかつての恋人の撮った写真と同じ景色をみつける。

そこは遊覧船乗り場のすぐ近く。

一人佇む本田に声をかけてきたのは、前日の少年であった。

遊覧船に乗り語り合う本田と少年。本田は前日の質問の答えを少年に語る。

そして本田自身も少年との会話の中で自身の想いへの答えをみつける。

その後に本田は偶然かつての恋人との再会を果たす。

そして本田は彼女に嘘をつく。

それこそが本田の見つけた答えだったのだ。

■登場人物

　本田勝男（ほんだかつお・男性・３４歳・絵本作家）

　四月一日まさる（わたぬきまさる・男性・８歳・小学生）

　新井達夫（あらいたつお・男子・２５歳・編集者）

　沖津寧々（おきつねね・女性・２４歳・書店員）

　四月一日仁美（わたぬきひとみ・女性・３０歳・まさるの母）

　四月一日麻子（わたぬきあさこ・女性・５５歳・まさるの祖母）

　子供１～４

　観光客

○書店内・イベントスペース

　　　店内に設けられたイベントスペースで絵本の読み聞かせを行う本田。沢山の親子連れが聴き入っている。

本田「『まいったまいった。もう悪さはしねぇから許してくれよ。タヌキは村人たちに泣いて謝りました』（絵を指して）ほら見て、ごめんなさいしてるね。村の人は許してあげたらいいと思う？」

子供１「許す！だってタヌキ泣いてるよ」

子供２「違うよ、嘘泣きだもん。ほら、タヌキ悪い目してる！」

子供３「きっとまた化かすんだよ！」

本田「さてどうかな……じゃん！『なんとタヌキ、みんなが話し合う隙に逃げ出そうとしたのです。こら待てタヌキ！村人の一人がタヌキを捕まえようとして……ギュっとおヘソを掴みます。逃げようとするタヌキ。絶対離さない村人。すると……ブチッ！！』」

タヌキのヘソがとれる絵を開く本田。子供たちはユニークな絵に爆笑。

本田「『イテテテ。そう叫ぶとタヌキは山へ逃げて行きました。しかしたまげたヘソがちぎれたぞ。だけどこのおヘソ……丸くてふっくらしててお饅頭みたいだな……それだ！』さてさて、村人はこのおヘソをどうしたかと言うと？」

子供４「食べちゃった！」

子供２「キタナイよ！」

本田「食べちゃった惜しい。実はね……じゃーん！『タヌキのヘソそっくりの饅頭をいっぱい作って売ることにしたのです。村中に溢れるヘソ、ヘソ、ヘソ、取り返してやろうと仕返しに来たタヌキはどれが自分のヘソか分かりません。それどころか道行く旅人が手にしたヘソをガブリ、あちらでガブリ、こちらでガブリ、まるで自分のヘソが齧られてるようで堪りません。ひぇぇぇ！こんな村もういられないと山へ帰って行きました。それ以来、ヘソ饅頭はタヌキに化かされないお守りとして人気となり、村は豊かになりましたとさ』おしまい」

　拍手する親子達。本田、嬉しそうにそ　れを眺めながらも視線は違う何かを探している様子。

本田Ｍ「……何やってるんだ。そんな運命的に出逢うハズなんてないじゃないか」

　　　沖津がやってくる。

沖津「本田先生、どうかされました？」

本田「え？いや別に」

沖津「はーい、じゃぁこれからお話をして貰った作者の本田勝男先生のサイン会を始めます。みんなはお父さんお母さんと一緒にここに並んでねー！」

　　　絵本を持つ子供たちに話しかけながらサインをする本田。その都度母親の顔を確認するようにチラリと見やる。

本田Ｍ「彼女は今はこの街にいる。ただそれだけなのに。僕は何を期待して……」

子供１「面白かったです！」

本田「え？有難う。どの辺が面白かった？」

子供３「おヘソがとれるとこが好きー！」

子供１「タヌキがイテテってのが好き！」

本田「本当？嬉しいな」

　　　賑わうサイン会。その場を仕切る沖津の元に新井がやってくる。

新井「結構人来るんだな？」

沖津「ウチは毎月やってるんで常連さんも多いんですよ。でも今日はいつもの倍以上です。流石は『タヌキのヘソ饅頭』ですよ」

新井「だろだろ？持つべきものは出版社勤務の大先輩ってさ」

沖津「本当、先輩昔から運だけはいいですものね。あ、全員終わったかな？」

新井「は？可愛くねぇな」

本田「あ、待って。君、サインまだだよね」

　一人で居るまさる。手にした絵本を無言で突き出す。

本田「お話どうだった？」

まさる「面白い……けどなんで？……なんでタヌキはいつも悪者なの？」

本田「え？」

まさる「何でタヌキを悪者にするの？」

本田「それは……ははは、何でだろうね？」

まさる「サイン……僕の名前も書いて」

本田「勿論。えと……何君かな？」

まさる「……たぬき」

本田「え？たぬき！？」

まさる「わ・た・ぬ・き！！これ！！」

　鞄に入った名前の刺繍を指さす。そこには【四月一日まさる】とある。

本田「四月……あぁこれで四月一日君。はい、今日はありが……」

　本田がサインを終えるとまさるは本を鞄にしまい走り去る。

本田「え？あ、ちょっと！！」

沖津「あ、またあの子か」

本田「また？」

沖津「よく一人でウチに来てくれてるんです。絵本が大好きなんでしょうね。ただ、いつもあんな調子で……」

新井「ささ、イベントも終わったワケだし打ち上げにでも繰り出しましょうか」

沖津「私まだ仕事があるんで」

新井「誰もおめぇに言ってねぇよ」

　　　本田は一人スマホをいじっている。スマホにはSNSの画面。湖畔に浮かぶ遊覧船の写真が映っている。

新井「って、またスマホですか？子供達相手にした直後にエロサイトですか？」

本田「まさか、ちょっとSNSを」

新井「こっち来てからしょっちゅう見てません？ほーら、サッサと呑みいきますよ」

本田「え？……あ、あぁ」

○河口湖畔のお土産屋・店先（夕）

　海外の観光客に接客する麻子。

麻子「あー、ホートーイズ、ジャパニーズメン！あぁ……ヌードルメン？」

観光客「nude men?what?」

そこに仁美がやってくると流暢な英語で対応。観光客を２階の食堂へ促す。

麻子「助かったよ仁美さん。流石は帰国子女？本当、ウチの息子なんかには勿体ないね」

仁美「そんなことないです。そうだ、今の方々２階の食堂でおほうとうを……」

麻子「分かったよ。じゃぁ店番は頼んだね」

　２階へ上がる麻子。

まさるが帰宅する。仁美にバレないようにそっとレジ近くからマジックを持ち出すと店先に並ぶ饅頭に×の字を書き足していく。まるで『タヌキのヘソ饅頭』のそれのよう。

まさる「出来た」

　仁美。まさるの悪戯に気づく。

仁美「まさる君！？何やってるの！？」

まさる「こうすると沢山売れるんだよ」

まさるは尚も×印を描き続ける。

仁美、まさるの手をとってそれを

やめさせる。まさるは仁美の手を

振り払おうとする。

まさる「やめろよ……やめろって！！」

仁美「それはお母さんの台詞でしょ。どうして店の商品にこんな悪戯……」

まさる「悪戯じゃないって！」

　　　まさる、仁美の手を振り払う。仁美咄嗟にまさるの鞄を掴むがまさるは鞄を棄てて逃げる。反動で尻餅をつく仁美。鞄の中身が散らばる。

仁美「痛ったぁ……いけない」

　散らばった中身を片付ける仁美。絵本

を手にする。

仁美「『タヌキのヘソ饅頭』？絵本……か」

絵本をパラパラと読み始める仁美。

仁美「そうか、これの真似して……あら？サインがある。本田勝……え？」

○居酒屋・店内（夜）

テーブル席で呑む本田、新井、沖津。

新井「ったく、おめぇは呼んでねぇだろ」

沖津「お仕事をお願いしたのはウチですから。せめてご馳走させて頂かないと」

新井「マジか？よしジャンジャン呑むぞ」

沖津「先輩は奢りませんよ。依頼したのは本田先生にですから」

新井「そりゃ誰の伝手だ？俺だろ？」

本田「ははは仲いいですね。確か二人は……」

沖津「大学の文芸部の後輩なんです。あ、あと仲は悪いですから。先輩が一方的に私を好きなだけです」

新井「出鱈目言うな馬鹿！」

沖津「だって先に友達申請して来たの先輩じゃないですか」

本田「友達申請？SNSか何かの話？」

新井「そうなんですよ。最近のSNSってお節介ですよね、頼んでもいないのに『あなたの友達じゃないですか？』なんて勝手に表示して来やがって」

本田「あぁ……確かに。あれってどういう仕組みなんだろうね」

沖津「メールアドレスを勝手に検索してくれるんですよ。つまり卒業して縁が切れてせいせいしてたのに、先輩が後生大事に私のメアドを登録してたから表示されたんです」

新井「馬鹿！普通イチイチ消さねぇだろ」

本田Ｍ「だから今頃になって彼女の……」

沖津「ま、でもそのお陰で本田先生とご縁が繋がったのは凄くよかったと思ってます。改めましてこの度は有難うございました。先生の作品は出版された去年からずっと人気作の上位で……」

本田「そんな、先生とかやめて下さい」

新井「そうそう、うだつの上がらない只のオッサンですものね」

沖津「先輩！？」

本田「いやいや、新井君の言う通りでね。絵本作家とは名ばかりで、最近まで本業はコンビニバイトでしたし。ははは」

新井「そうそう。それで婚約者にも逃げられたんでしたっけ？はははは」

本田「ん？まぁ……そんなこともあったかな」

沖津「え？あ、でもその『タヌキのヘソ饅頭』は物凄く人気で……」

本田「そう。タヌキのお陰でやっとこさ作家らしくなったというか」

新井「はい！そんなタヌキを売れると見抜いたのが何を隠そうこの俺です！」

沖津「たまたま持ち込んだ時の担当が先輩だっただけですよね」

新井「違ぇよ！直感でビビッと来たぜ。こりゃイケる。時代はタヌキだってさ」

本田「タヌキ……タヌキねぇ」

沖津「そうだ、お帰りは明日の夜って仰ってましたよね。なら明日は観光でもしませんか？案内します。タヌキ案内！」

本田「タヌキ案内？」

沖津「ご存知ですか？河口湖にはカチカチ山ロープウェーがあるんです。同じタヌキを描く作家として是非一度！！」

本田「カチカチ山……ですか」

○カチカチ山・山頂

　　　山頂から景色を眺める本田と沖津。

沖津「どうです？カチカチ山」

本田「へぇ、凄いなぁ。河口湖が一望出来るんですね。あれ？あの船って……」

沖津「遊覧船ですね。ロープウェー乗り場のすぐ近くから出てるんですよ」

　　　団子を頬張りながら新井がくる。

新井「本田さんこれ美味いっすよ。たぬき団子ですって。アレじゃないですか、タヌキのヘソ饅頭のパクリですよきっと」

本田「こっちが先に決まってるでしょ」

沖津「先生！ここで写真撮りましょう！」

　手招きする沖津。そこにはウサギに懲らしめらるタヌキのオブジェ。

新井「はははは、見事にボコられてますね」

沖津「あれ？どうしました先生？」

本田「いや、ちょっと……」

沖津「行きますよ。はいチーズ」

　　　沖津がスマホで写真を撮る。

沖津「感動です。ヘソ饅頭の作家がカチカチ山のタヌキとツーショットですよ」

本田「……沖津さんは絵本詳しいんですよね」

沖津「え？まぁ児童書の担当続けて結構経つんで。でもきっと先生程では……」

本田「どう思います？何でタヌキはいつも昔話で悪者なんですかね」

沖津「え？えぇと……どうしてですかね」

新井「んなの化かすからでしょ」

沖津「それならキツネも化かしますよ」

新井「馬鹿か。キツネはお稲荷様ってな具

合に神様として祀られてんだぞ？タヌキが祀られてるか？おポンポコ様なんて締まらないったらねぇだろ？」

沖津「そうか……でも」

新井「それより本田さん腹減りません？山下りてほうとう食いに行きましょう」

　新井が一人駆けていく。

沖津「はぁ。今食べてたばっかなのに」

○ロープウェー・中

　ロープウェーで山を下る一行。二人が外の景色を見る中、本田は一人スマホでSNSを見る。SNSには湖畔に浮かぶ遊覧船や船内から眺めた景色の写真らが載っている。

○ロープウェー乗り場・出口

　　　階段を下りていく一行。壁面にはカチカチ山のお話がイラストと共に描かれている。それを熱心に眺める新井。

新井「あれ？このカチカチ山俺の知ってるのと違いますよ」

本田「え？違うって何が？」

新井「タヌキの奴お婆さんをババア汁にしてお爺さんに食わすとか、最後ウサギに殺されるとか、結構エグイなぁ」

本田「カチカチ山ってそんなでしょ？」

沖津「最近のはマイルドなんですよ。お婆さんは死なないし、タヌキは最後は改心して山の幸を届けたりするんです」

新井「そう、タヌキの恩返し的な」

本田「へぇ……そうなんだ」

沖津「あ、先生。あれがさっき言ってた遊覧船乗り場ですよ」

本田「え！？どれですか？」

沖津「ほらあそこですよ」

　本田、スマホを取りSNSを開く。

新井「またですか？飯食ってからに……」

本田「悪い。ちょっとトイレ行って来るか

ら先に店入っててくれないかな」

沖津「別にトイレくらい待ちますよ」

本田「いや、その……結構大事だから。ははは。ほら、後でまた連絡するからさ」

　　　本田が慌ててその場から走り去る。

沖津「え？ちょっと！？」

○遊覧船乗り場

　　　本田が駆けてくる。辺りを見回すとSNSを開き画面隅に出てくる【友達ではないですか欄】にある【HITOMI】という名前を選択。英語で綴られた日記と共に常々本田が観ていた遊覧船の写真が出てくる。

本田Ｍ「……ここなんだ。ってことは近くに？」

　辺りをキョロキョロする本田。再びスマホを見やり大きくため息。その場にしゃがみ込み湖を眺める。

本田Ｍ「……そうだよ。何考えてるんだ僕は。実際いたらいたでどうするつもりだ？何て話しかける？そもそもどんな顔して……」

まさる「タヌキの人？」

本田「わっ！？」

　本田が振り返るとまさるがスケッチブックとを持って立っている。

本田「君は昨日の……」

まさる「何してるの？」

本田「いやその……景色を見てた？」

まさる「一人で？」

本田「まぁ……今は一人で」

　　　暫く二人の間に微妙な間が生じる。

まさる「ねぇ、オジさんもひょっとしてタヌキだったりする？」

本田「はい？」

まさる「僕、クラスでタヌキってあだ名なんだ。名前がワタヌキだから」

本田「あぁ……あ、だからあんな質問……」

まさる「うん。でもさ。僕気づいたんだけど、ひょっとしたらオジサンもじゃないの？」

本田「は？」

まさる「もう小２だから漢字くらい読めるもん。オジサンは本田ってんでしょ。本はニッポンのポン。それに田んぼのタ。じゃぁポンタでしょ。タヌキみたいな名前じゃん」

本田「僕が……ポンタ？」

まさる「……やっぱりそうなの？」

本田「……そうか。成る程ね。（SNSを眺めながら）ねぇ、君さ……あれ乗ったことある？」

○遊覧船・中

　　　河口湖を颯爽と進む遊覧船。心地よい風が本田とまさるに吹く。

本田「へぇ、結構速いんだなこれ」

まさる「慣れちゃったからよく分かんない」

本田「そんなに良く乗ってるの？」

まさる「月に一度くらい。僕が喜ぶと思ってお母さんになった人が乗せてくれる」

本田「なった人？」

まさる「お父さん入院してるし遠くには行けないからいつもこれ。なんかもう飽きちゃったかも」

　まさる、スケッチブックを開くと何やら描き始める。

本田「（少し様子を見て）何やってるの？」

まさる「絵本のこーそー。あぁ、オジサンが話しかけるから失敗しちゃった」

　　　まさるがスケッチブックを破る。突風が吹きそれが飛ばされる。

まさる「わっ！！」

　すかさずそれをキャッチする本田。中を開くと稚拙な絵で描かれたスーパーマンのような姿のタヌキ。

まさる「勝手に見ないで！」

本田「これ……タヌキ？は……ははははは」

まさる「何で笑うんだよ！！タヌキが主役じゃおかしいかよ！！」

本田「悪い悪い。いや、面白いな。何これ、ヘソばくだんって」

まさる「……オジサンの本をサンコーにしたんだよ。お饅頭より爆弾の方が強いし」

本田「そうか……そりゃ光栄だな。へぇ、このタヌキはヒーローなわけ？」

まさる「そうだよ。悪者をやっつけるんだ」

本田「ヒーローか……オジさんあれから考えたんだ。何でタヌキは悪者なのか」

まさる「何で？」

本田「担当さんはタヌキは化かすからだって言ってた。うん。確かに人を騙したり嘘をついたりするのはよくないことだ」

まさる「そんなの分かってるよ。でも何でタヌキが嘘つきだって決めつけるの？」

本田「ううん。残念だけど。オジさんもタヌキはやっぱり嘘つきだと思う」

まさる「何でだよ！」

本田「何でって……君が言ったんだろ。オジさんもタヌキだからさ」

まさる「タヌキなの？」

本田「そう。だから分かるんだ。タヌキは嘘をついて化かさずにはいられない。いつだって嘘をつき続けてる」

まさる「おかしいよ！コンキョは？」

本田「昔むかし……と言っても４年くらい前かな。東京にポンタというぐーたらタヌキが住んでいました」

まさる「それ……オジサンのこと？」

○イラスト

　本田似のタヌキと女性が出逢う絵。

本田「ある日ポンタは人間のお姉さんと恋に落ちました。ポンタはお姉さんと結ばれる為に一生懸命化け学を学んで立派な人間に化けようと努力しました。けれどもいつまでたってもポンタは人間になれません」

まさる「なんでなれないの？」

本田「そうだね。多分ポンタには化け学の才能がなかったんだ」

まさる「じゃぁどうなっちゃうの？」

○イラスト

　　　タヌキと女性が暮している絵。

本田「お姉さんはそれでも待ち続けました。いつかポンタが立派な人間になれる日を夢見て。そうして気が付けばお姉さんは沢山の時間と沢山のお金を使っていたのです」

まさる「ポンタはどうなったの？」

本田「どうにもなりません。相変わらずのぐーたらタヌキです。どうして人間に化けられないのか。ポンタは悩んで悩んで一つの答えを見つけます。そう、お姉さんです」

まさる「お姉さん？」

○イラスト

　　　タヌキがカンカンになって女性に女性に怒鳴っている絵

本田「ある日ポンタはお姉さんに言いました。僕が人間に化けられないのはお姉さんのせいだ。お姉さんが近くにいて僕を甘やかすせいだ。今すぐ出て行け！もう……もう二度と顔を見たくないと」

まさる「意味わかんない！だってポンタはお姉さんのことが好きなんでしょ？」

○イラスト

　　　一匹ぼっちの部屋で泣くタヌキの絵。

本田「翌日、家からお姉さんは消えていました。優しいお姉さんはワガママなポンタの願いを文句一つ言わず聞き入れたのです。一匹になってしまった部屋でポンタは涙しました。もう二度と会えないお姉さんのことを思って。そうだってポンタは……」

○遊覧船・中

　景色を眺めながら語る本田と、そんな本田をじっとみつめるまさる。

まさる「嘘ついたの？お姉さんのこと好きなのに出てけって言ったの？」

本田「よく分かったね。さすがタヌキ仲間」

まさる「何でそんな嘘つくんだよ！だってポンタ……」

本田「ここでクイズです。（まさるの持つ色鉛筆を指さして）嘘は一体何色をしているでしょうか」

まさる「は？嘘の色？」

本田「そう。この色鉛筆で言うとどれ？」

まさる「（赤鉛筆を取り）赤に決まってるじゃん。真っ赤な嘘って言うんでしょ」

本田「正解。でも答えはもう一つある……そう、ポンタがお姉さんに教えて貰った嘘の色……（白鉛筆を取り）白。英語だとホワイトライ。白い嘘って言葉があるんだって」

まさる「ホワイトライ？」

本田「誰かを幸せにする為につく嘘のこと。タヌキは嘘が得意です。一匹になったポンタは嘘に磨きをかけました。そしていつしか嘘でご飯が食べられるようになりました」

まさる「オジサン？」

本田「だってポンタは絵本作家になれたんだもの。ヘソがとれるタヌキも饅頭に怯えるタヌキも本当はいない。全部嘘。だけどこの嘘は何色だと思う？」

まさる「……白？」

本田「そう、白い嘘。多分ね、君もかなり嘘が上手なタヌキだと思うよ」

まさる「僕が？」

本田「だって苗字が４月１日だろ？一年で一度嘘つき放題の日じゃないか」

まさる「……そうか。僕もオジサンみたいな白い嘘つける？」

本田「そりゃ天性の嘘つきタヌキだもの」

まさる「うん」

本田「悪者で何が悪い。嘘つきで何が悪い。いいんだよ。それがタヌキだもの」

まさる「……そうか」

　強い風が二人に吹く。まさるは再びスケッチブックにお話を書きはじめる。

○遊覧船乗り場

　下船する二人。

本田「どう、進んだ？」

まさる「うん。コーソー進んだ」

本田「そうか」

まさる「楽しかった。じゃぁね！！」

　　　まさるが走り去ろうとするのを呼び止める本田。

本田「待って！！……一つ質問してもいいかな。さっきのお話の続き」

まさる「え？」

本田「やがてポンタは人間にも化けられるそこそこ有名なタヌキになりました。一方お姉さんは別の人間と結ばれました。けれどその人間は病気に罹ってしまい、なかなか生活も厳しいようです。あぁ、あの時タヌキに使ったお金があればこんなことにはならなかったのに」

まさる「うん」

本田「さて、あんなことを言ったポンタは今更お姉さんに会いに行ってもいいでしょうか。どんな顔して会えばいいでしょうか。何をしたらいいでしょうか」

まさる「う～ん……会えばいいと思う。

だって嘘が得意なんでしょ。だったらまたお姉さんを幸せにする白い嘘をついたらいいじゃん。ポンタなら余裕で出来るよ」

本田「……そうか。そうだな」

　　　まさるが走り去る。本田がスマホを取り出すとそこには新井からの沢山の電話とメールの着信履歴。

○お土産屋・２階食堂

　　　麻子が新井、沖津を見送る。

新井「最高に美味しかったです！」

麻子「ありがとうございます」

沖津「にしても、先生どうしたんですかね」

○同・１階店先

　　　新井と沖津が下りてくるとそこには本田が待っている。

新井「本田さん！？ったく。一体どこ行ってたんですか？電話にも全然出ないし」

本田「悪い。ちょっと色々」

沖津「スミマセン先生。実は先に食事……」

新井「仕方ないな、今から食べます？」

本田「気にしないで、僕は饅頭でも買って腹の足しにするよ」

沖津「じゃぁここで買っちゃいます？」

　　　途端に辺りを物色する新井。

新井「あ、これ美味そう。こっちもいいな」

沖津「もう、自分の選んでないで先生の……」

新井「あぁっ！！ちょ！ちょっ！！本田さんこっちきて下さいよ！！」

　　　手招きする新井。二人が駆け寄るとそこには刻み海苔で×字が記された饅頭。

沖津「タヌキのヘソ饅頭！？」

新井「ちょっと、これウチに無断でやってますよね。俺ガツンと言ってやります」

本田「やめなって。別にこれくらい……」

　　　そこにまさるがやってくる。

まさる「あ！オジサン！？」

新井「あれ？あなたいつもの……」

本田「どうしてここに？」

まさる「だってここ僕ん家だし」

　仁美が小走りにやってくる。

仁美「すみません。いらっしゃいませ、ほらまさる君もういいから……え……」

本田「あ……」

　本田と仁美。視線が合ったまま動きが止まってしまう。

仁美「そ……その……」

本田「……あ、あの！……この饅頭一つ貰ってもいいですか」

仁美「は、はい」

　饅頭を紙袋に包みだす仁美。

新井「あ、それからこれひょっとしてタヌキのヘソ饅頭を真似てません？」

仁美「え？……は、はい」

新井「やっぱり。この本田さん、タヌキのヘソ饅頭の作者なんですけど。こういうの勝手にやって貰ったら……」

仁美「その、スミマセン。その……」

本田「新井さん何言ってるの。冗談じゃない。こんなのが僕のヘソ饅頭なワケないでしょ」

新井「はい？」

本田「……全然駄目だこんなの。見た目も（紙袋を受け取り饅頭を頬張り）味もイマイチだ。こんなのがタヌキのヘソ饅頭だなんてありえない。おこがましい」

新井「いや、でもどう見たって……」

本田「全然違う。だからその……もっと沢山作って、沢山売って、クオリティを上げて下さい。ちゃんと出来てるかどうかまた僕がチェックしに……来られるほど僕は暇じゃないんで。その……新井さん、このヘソ饅頭もどき、宣伝して貰えないですか？」

新井「はい？」

本田「ヘソ饅頭のファンの人達にこれを食べて貰って判断します。そうしましょう」

新井「いや、勝手に決めないで……」

本田「頼みます」

新井「……はぁ、面倒臭いなぁ」

仁美「勝男さん……」

本田「（頬張りながら）あぁ、全然ダメだこれ」

　　　本田の目に涙があふれる。

まさる「オジサン……泣いてるの？」

本田「違う。喉に詰まっただけ……」

まさる「ううん。タヌキには分かるんだよ。同じタヌキの嘘なんてさ」

　　　まさるが本田に微笑みかける。本田、涙目になりながらまさるに微笑み返す。

　　　【終】

※ご利用上の注意※

・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。

・ご利用に当たっての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。

・本脚本をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。

・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。

・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

　※連絡不要の場合

　　・仲間内で集まっての練習でのご利用。

　　・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

　※連絡が必要となる場合

　　・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

　その他ご不明な点ございましたらお気兼ねなく下記までご連絡下さい。

　gumba1227@hotmail.com（岩本）